



2012 年 4月号

滑稽俳句協会会長 八木 健氏 に聞く 42

紅緑偏「滑稽俳句集」を読み解く 34 （聞き手 高橋素子）

高橋 > 「三寒四温」は冬の季語ですが、「啓蟄」の日がとつくに過ぎても、春はその全貌を現さず、未だ数日おきにとても寒い日が続いています。でもよく見ると、ここ近江でもいつの間にか菜の花や梅が咲いています。いつもながら、佐保姫は気まぐれですね。

会長 > 佐保姫の肩を持つわけじゃありませんが、彼女は舞台の袖で出番を待っていたのです。彼女の一存で飛び出してくるわけにはゆかぬ。なかなか暖かくなならないから、苛々していたのではないのでしょうか。

高橋 > 確かにそうですね。それでは本日の本題に。前回に引き続き、紅緑偏「滑稽俳句集」の「秋詠物」、大江丸の次の句からです。本日もご解説よろしくお願い致します。

白河にて

能因にくさめさせたる秋はここ 大江丸

会長 > この句は句碑になっています。これは能因法師の、「都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞふく白河の関」の有名な句がありますが、実際には白河の関には行かなかったという噂があったので詠んだ句です。こんな「からかい」の句が句碑になっているとは驚きですが。

高橋 > えっ！句碑に！そう言えば、「滑稽俳句集」の自序（著者自ら書いた序文）の中で、紅緑は同じ様に能因をからかった横井也有の句を載せていますね。

嘘の旅して能因が暑さかな

この時、「京都から白河の関までは一ヶ月半ぐらいしかかからない。霞の立つ春から秋風の吹く秋まで半年もかかるはずがない……。本当は能因は旅に出なかった。旅をしたように見せかける為、庭に出て肌を焼いたらしい。だから暑かっただろう」と、面白い解説をして下さいましたね(インタビュー⑨・紅緑偏「滑稽俳句集」を読み解くⅡ 参照)。

では、次に参ります。

國より帰る

我をつれて我影かへる月夜哉 素堂

会長 > この句は、影が先行している風景を詠んだもので、背後に月を背負うと、こういうことになる。影を擬人化とは面白い句で、現代でも通用する新しさがあります。素堂は芭蕉と親しい俳人でした。

高橋 > 本当に今、通用する面白い句ですね。私もこんな句を詠んでみたいです。成る程、芭蕉の俳友ですか。

僧と咄し明して

小便に起ては月を見ざりけり 其角

会長 > これは、外厠で用足しをしても、今宵の月を見ずに戻るという。それ程に話が弾んでいたと言うことですね。

高橋 > 次に参りますね。長い前書きですよ。

伊勢の秋屋闌更の百日なり

とて句を乞はるああはかな

巳のとしのけふは西阿彌の

もとにて一夜はいくわいせ

しものを

去年の事月やは物を思はする 大江丸

会長 > 月を見ていて去年のことを思い出した。月を見れば、ついつい物思いに耽ることになるという事ですね。

高橋 > 「月やはものを思はする」、百人一首に西行法師の同じ様な和歌がありますね。恋歌ですが。

なげけとて月やはものを思はする

かこち顔なるわが涙かな

次は、紅緑、也有、蕪村の句続けてお願い致します。

耳を患ひて

鼻かめば耳が鳴る也秋の風 紅緑

山王

柿に戀すればや赤し猿の顔 也有

武者繪賛

御所柿にたのまれ貌のかかし哉 蕪村

会長 > 「鼻かめば耳が鳴る・・・」、誰でも体験したことがあるだろう内容で、読んで分かる句です。秋の風は取り合わせでもあります、耳に響く音としても描かれています。

「柿に戀すればや・・・」、猿の柿好きを「柿に恋している」としています。その恥じらいで赤面しているのだと説明しています。

「御所柿にたのまれ貌・・・」、柿泥棒から守ってくれと、御所柿に頼まれたような顔をしている案山子ということですね。

高橋 > 成る程！お猿も案山子もまるで人間の様で面白いですね。次は子規と也有の句、ご解説下さいね。子規の句、「國手」は名医のことですね。

露月國手を置く

澁柿馬鹿の薬になるまいか 子規

妻におくれたる人に

朝がほのこんともいはでうき別れ 也有

五雲を悼む

晝顔にきく朝顔のあはれかな 也有

会長 > 「澁柿馬鹿の薬に・・・」、後に松本たかしが、「澁柿の滅法生りし愚かさよ」と詠んでいます。澁柿は甘くないから、愚かの代名詞として使われたきらいがあるようです。子規は、使い道がないから、「馬鹿につける薬はない」を承知で作句していて、頓知が利いた句です。

「朝がほのこんとも・・・」、朝顔は江戸時代に盛んに栽培されたもので、妻に先立たれた夫に贈った俳句でしょう。朝顔の紺、花の色ですね。「こん」は来ないに言い換えています。妻に先立たれた夫に、「また来るよ」とも言わず亡くなってしまいまし

たね。と慰めているのである。

「晝顔にきく朝顔の・・・」、地口の句です。朝顔は早朝から咲くので、ご苦労で哀れ。それに比べれば昼顔は楽勝ですねと、言うことでしょう。

高橋 > 「馬鹿につける薬はない」とは今でもよく使われますが、子規の時代から皆知っていたと言うことですか？面白いですね。次に参りますね。

寄涼貸

こち向けと蔓を動かす瓢かな 希因

洛の惟然の宅より故郷へ帰るに

鼠ども出立ての芋をこかしけり 文革

会長 > 「こち向けと蔓を・・・」、瓢は棚に吊るして成らせますが、眺めるのに都合よく垂れるとは限らないから、見やすい絵になる向きに修正するのですね。

「鼠ども出立ての・・・」、「こかす」は「倒す」の意。とれたての芋を盗ろうとして倒したな、というほどの意味でしょう。

高橋 > 次は几董、成美、大江丸の句です。ご解説よろしく願いいたします。

倣七歩詩

柚を焼や味噌は釜中にありて泣 几董

食に肉なし

わびぬれば柚味噌の釜を食ひけり 成美

百千万劫菩提種

ひがんの蚊釋迦のまねして喰せけり 大江丸

会長 > 「柚を焼や・・・」、柚子を味噌をつけて焼いたものの、味噌は釜の中に落ちてしまったのですね。

「わびぬれば・・・」、わび住いであることよ。食うにこと欠いて釜の柚子味噌を食べているのだ、と自嘲していますが、成美は実際は金持ちで、貧乏に憧れていたの、こんな句を作ったと思われます。

「ひがんの蚊・・・」、釈迦は生き物を憐れみ、蚊に食われても決して蚊を殺すことをしなかった。彼岸なのでそれに習ったというのです。

高橋 > 金持ちの成美は貧乏に憧れていた？ここまで無いものねだりとは・・・。人の欲には限りがありませんね。次は大江丸、酉比の句です。

しゐんきよのへらず口

をらが角力ころぶ轉んでくれたて夜か寝よし 大江丸

獨床

ひとり寝て砧を笑ふ鼠かな 酉比

会長 > 「をらが角力・・・」、「しゐんきよ」は、「樂隠居」の爺のこと。樂隠居の爺さんが、相撲をとったところ、轉んで負けたのですが、負けたと言わず、「転んだ」ので夜に寝た気分になった。とへらず口をきいたというものです。

「ひとり寝て・・・」、砧は、古くなって硬くなった布を叩いて柔らかくするもので、その行為を砧打ちといいます。一人暮らしで一人淋しく砧打ちする自分を、鼠まで嘲る

ようだと思ながらに思ったということですね。

高橋 > 今日は句の時代背景が分かるご解説、本当に有難うございました。とても面白くてもっとお聞きしたいと思いますが、残念ながらお時間になってしまいました。最後に浪曲調で今日のまとめお願い致します。

会長 > ♪秋いい風ええ吹けば暑さを忘るなり 去年の糸瓜の棚あも朽ち 冬の準備のおおおおおおお砵打つううう♪